

「その誰か」になるということ



藤木 充

1、やまびこ総合支援センターまで——個人的なことも少し

1) 着任から指導部まで

昭和50年の第二びわこ学園着任、以降指導部へ移動する昭和63年までの14年を西病棟で指導員をしていた。重症児者の療育指導を、と言いつつ「途方に暮れる」ことが多かったように思う。着任前のアルバイト・臨職（もちろん学生であったが）の二年も含め、その頃のことなので、勤務終わりは、若いみんなが先輩職員谷さんの部屋に集まり、毎晩のように酒を酌み交わし、熱い議論が続くのが恒例であった。

18時半に始まる月2回のグループ会議は、0時を超え2時ころまで続き、たいていの場合、個別の園生へのかかわりとかかわりに対する職員の想いを披歴しあうことが普通であった。

2) 施設や病棟の運営

この間に、施設や病棟の運営について、分会解散となっていた組合（日社労組第2びわこ分会）を再建（して新しい組合・第2びわこ学園労働組合）することや体制検討委員会や将来検討委員会などを通じて組織業務体系の変更を進めた。こんなことを病棟のリーダーたちが集まって（勝手に）検討したことで、その後は、なんだか責任を取る形で、指導部や総務部などを分担して担当することとなってしまい、私には、法人や施設の総務部長・事務長など、総務管理を受け持つことが回ってきた。

3) この時代の学園

この時代のびわこ学園は「職員の腰痛」問題が様々に影を落とし、その必要性を誰よりも強く感じておられた岡崎園長ですら「短期入所や外来は、もう少し病棟が落ち着いてからにする」といわざるを得ない状況を作っていた。入所を守ることに専念する状況－地域へ向けた仕事の空白は、当時のびわこ学園の「仕事」への厳しい評価を生んでいたように思う。

この閉塞状況を打開する状況は、平成元年にやってきた。

4) 風は湖北から

季節は冬、何月だったかはが定かに記憶に残っていない。年末の寒い時期であったかとも思うけれど、湖北の在宅重症児者の家族が湖北の県事務所の職員とともに「学校卒業後の活動場所を地域に作りたい。びわこ学園の協力がほしい（地域に重心の通所を考えると、その議論と運営の中心にびわこ学園がいるのは当然のことではないか）」という働きかけをするためびわこ学園に来られた。通園の実施だけでなく、将来第三びわこ学園を彦根以北に作ってほしいということであった。それ以前のほぼ一年間、養護学校の卒後の通所支援を独自に続けてこられるという大変な経験の上での申し出であった。

これまでの入所か在宅か、ではなく、もう一つの選択——地域での生活を支える仕事ま

でを学園の仕事とすること。

この申し出を受け、翌年（平成2年）から県のモデル事業として重度障害者の通園事業をびわこ学園が実施する形で湖北通園が開始された。最初の通園は長浜商工高（現長浜北西高）の向い側にある長浜カトリック教会の一部を借りての出発であった。

国の通園モデル事業もほぼ同時に全国8か所で開始された。重症児療育の先頭に立ってきたと自負してきたびわこ学園がこの8か所のモデルに入っていない状況が、当時の福祉協会内でのびわこ学園の位置を示しているようにも思うが、国のこの動きに遅れることなく独自には猿が通園事業を開所できたことが、以降のびわこ学園の仕事のターニングポイントとなったのだと思う。

湖北に引き続いて、県単事業として一般事業化される重度障害者通所訓練援助事業によって彦根・近江八幡・第一びわこ学園内と大津の通所が開始された。平成8年に一般事業化された国基準のA型、B型の通園事業体系による湖北（たいこ、これにより湖北通園は県単の通園とB型の通園を同じところで行うこととなる）、第二びわこ通園が事業を開始。

湖北通園のB型は、全国でただ一か所、単独型（通常は、通所更生施設等の併設となる）の開所で、以降も、同様のケースはない。私の地域事業部長としての最初の仕事が、この事業認可に向けてのことであった。実施場所の意向（通園する障害者の広がりにより各通園とも何度かの通園場所の移動を行うことになる。）により湖北通園は長浜市役所東館になり、B型通園の実施の可否を計るため、厚生省の担当官が来て、ほどなく認可となった。

最初の通園

カトリック長浜教会



近江八幡通園 坂を上って
ヴォーリス記念病院 一番奥



彦根通園、東近江通園も当初の場所から、それぞれに移転の行うこととなり、地域の行政や家族市民との関係が深くなった。これらの経験が、大津市の障害者支援センター創設への法人としての参加につながっていくことになっていくことになる。

2、地域で仕事するという事

1) 大津の総合支援センターを構想準備する

大津のセンターは、「地域支援の拠点」として機能することとされると同時に医療機能の整備も行われ、具体的な形で、医療支援コーディネーター（医療専門職支援を含めた地域相談支援調整機能）を目指すものとした。

支援センターの立ち上げ時には全体45人の職員構成を、重心からの異動者1/3、施設などの経験のある人1/3、新卒者や未経験の人1/3としました。新規事業の開始時としては、経験者の割合を相当に高い割合で出発できたのではないかと思います。それでも、みんなの経験は、多くは入所「施設」の経験であり、いわゆる地域生活支援としてのデイサービス、ヘルプ、ナイトケアなどの地域に居住する障害者の「今」必要になったことに

「今」答えるサービスについては、思いきり素人の集団でもありました。それだから、だけでもないんだろうけれど、ずいぶん朝早くから遅くまで、あれこれおこる状況に対し、相談やサービスに奮闘する状況が続いたように思う。

立ち上げ前、12月から2月の末まで、土日もほとんど休まず調整や搬入が続いていたことなど、開所後の利用者も含めみんな「困りあったこと。大変だったこと。けど楽しかったこと」が、大きすぎて整理されずにあります。

事業所立ち上げの準備のための社会保険労働保険事務や共済事務、銀行の窓口開設や職員の給与振込準備など、あらゆることがありました。

2) 準備室——あの時は相撲部屋

大津の新事業の準備室をという辞令が出たのは成11年でした。その時の仕事は、2年前に第二びわこの総務部長から変わって、同じく第二びわこの地域事業部長・通園センター副所長（所長は山崎園長）で、概ね、湖北、彦根、東近江の通園を巡回して、第二びわこ通園の様子をうかがうというものであった。

第一びわこ学園の一室（食堂の並びの端の部屋、今は多分清掃作業員さんの部屋かな）を大津知的障害者地域支援センター準備室（その頃は、藤木・田村君や米沢君などで「相撲部屋」といわれていた）にして、多分、田辺さんや、口分田先生とともに大津の地域に何を実現するのかの議論をしていた。

3) やまびこ総合支援センターの成立

やまびこ支援センターはその前身であるやまびこ園・やまびこ教室が現在のにおの浜の福祉センターにあり、同所にあった大津市作業所とともに独立させるとともに、いわゆるしが型の生活支援センターも加えた総合支援センターとして地域の障害者支援の拠点を作るということで、構想された。

滋賀県の生活支援センターは福祉圏ごとに「相談支援」と「支援サービス（24時間ヘルプとナイトケアなど）のサービスを行う拠点を整備する」というものでした。大津の支援センターの構想は福祉圏域としては最後の生活支援センターであり、それまでの多圏域の生活支援センターの機能に加えて、支援の対象に重度重介護要医療支援を加えることとして検討した。

医療対応を進めるための形として「居宅介護」や「相談支援」への看護職員の配置、専任の医師、PT、OTの配置など、それまでにないスケールのセンターとして構想された。

やまびこ支援センターは正式には「やまびこ総合支援センター」です。知的障害者支援センターという冠が最初の構想にはありましたが、障害の認知がまだできていない家族等であっても、この子のことが気になるので相談に乗ってほしいという時に気軽に寄れるところということで、総合支援センターという名称になった。

相談支援や居宅介護、医療支援につての職員配置と通所事業を一体的に運営し、総合支

やまびこ支援センター



援とした。

通所については、大津市作業所からの比較的安定した方の受け止めと同時に、重度用医療者及び自閉・重度知的障害で行動障害を伴う人の池入れを行うこととなり、介護比を作業所タイプは2.5対1、行動障害タイプを2対1、重心を1.5対1として準備を進めた。建物構造的には、重心対応はできるだけ開放的な空間を設定し、作業所タイプ、行動障害に向けて閉じた空間を確保できるように工夫した。したのほしたけれど、現実の障害像に合う環境整備は至難の業で、あちこち不適合を起こしているのではないかと思う。

3、そして ここから

思いの中にある記憶は、時間軸があいまいで、間違っただ記憶も多々あるのだと思う。

初めに思ったこと。

地域で仕事をするということは、「利用者発信」に徹すること。

必要とすることを 必要な形で 必要な時に 支援するということ

そして今、私がしていること、しなければならないことの多くは、ともにびわこ学園で青春した彼・彼女らの熱い思いを受け継ぎ、ゆるぎない実践とすることだと思っています。重度 重症の、自閉・行動障害の人たちの「生き難さ」を受け止めて「その人らしい」命を輝かせること。障害を持つ人に伴走し「その人らしい」生き方を支えられる相談支援（ソーシャルワーク）を実践すること。どれもが、彼らが実践し実現しようとしたものの精華として地域に広げなければなりません。様々にある地域の障壁を地突き抜けるようなあつい実践が、彼らの思いを引き継いだ私たちのできるただ一つのものだと思います。

岡崎園長の「熱願冷諦」「この子は何を思っているのやろ」などなど、まだまだ引き継がなければならないことがあるのだけれど、まだまだ、もっともっと経験と実践が必要なのかと思う。

誰かがしなければならないことであれば

すすんでする

「その誰か」になること